

〈研究論文〉

日中二大学間協働日本語遠隔授業の構築

—授業内容の樹立を中心に—

大塚 薫
王 勇 萍

要 旨

本研究は、日本国内における留学生を対象にした日本語作文授業と中国内における日本語学専攻学生に対する日本映像文化の授業をPC及びモバイル用画像通話プログラムである Skype⁽¹⁾を使用して遠隔協働授業カリキュラムを構築した上で実践することで、遠隔協働授業の可能性及び改善点に関する考察を行ったものである。

遠隔授業は同一のテーマと内容で行われ、両国でそれぞれの授業を進行しながら1学期間全16週の授業内で共同のテーマの発表及び討論を主題とした5回の遠隔授業が実施された。

その結果、学習者による評価では5回実施された遠隔授業において遠隔授業方式に関しては概ね高い評価であり、授業内容に関しても事前準備を整えて臨む遠隔討論形式の有用性が実証された。この形式の授業は、異文化理解、異文化交流、遠隔による授業方式、日本語学習、日本語技能における内省の面で効果を有する反面、ネットの回線及び教室の設備の不具合や接続時間の長さ、授業内容面、特に討論方法での改善点が挙げられた。

今後は、インターネット回線の安定化及びモバイルPCやタブレット端末等の普及に伴い、大人数教室の授業において少人数グループ化による遠隔グループ別討論授業への応用が期待される。

【キーワード】

遠隔授業、Skype、日中協働授業、遠隔教育、遠隔討論

1. 研究の背景と目的

中国内陸部の日本語学習者は、地域社会に居住する日本語母語話者があまり存在しないことから、実生活で日本人との交流による多様な日本語に接する機会は限られている。このような環境下では、日本語学習者の学習意欲及び日本語力の向上に多大な影響を及ぼすことが予想される。これを補填する

方法として、遠隔教育の活用が考えられる。大塚(2008)では、遠隔授業は「日本語母語話者教授者が不足している地域においても現地の日本語非母語話者教授者とのチームティーチングによる様々な活用方法が可能になる」とし、「中上級レベルの学習者に対する指導に困難のある海外の日本語非母語話者教授者と日本語母語話者教授者との協力体制の構築等今後より活発な利用が期待できる」と述べている。

従来の遠隔教育は、主に「インターネットを利用した遠隔教育」と「衛星会議システムを利用した遠隔教育」が行われてきた。前者は Email やホームページ、SNS を利用して教育情報の提供及び動画講義(VOD)が行われ、多数の学生を教育することに効率的であり、サイバー大学や放送大学等で多様な形式で利用されている。しかし、一方向で転送されるシステムのため直ちにフィードバックが得られない状況であり、多様な変化を要求する会話や作文等では適切な効果が表れにくいという弱点がある。また、後者は一方的な教育ではなく、双方向画像通話が可能であり、リアルタイムでお互いの意思の伝達を行うことができるが、衛星使用料及び施設面で相当な費用がかかるので一般化されず一部の学校及び教育機関等での特別な状況のみで使用されているのが現状である。

近年、IT 通信技術の進歩及び社会インフラの整備、すなわちインターネット回線の発達や画像通話技術の開発により、特別な施設がなくても個人のパソコンと Web カメラとマイクさえあれば、双方の顔を見ながら対話ができる安定的な一般教室内での遠隔授業が可能となり、遠隔接続を通じた会話や作文教育への応用が図られてきた。

そして、現在は Wi-Fi や携帯電話の無線通信規格の 3 G や LTE、WiMAX などの無線 LAN が普及され、無線 LAN 環境が整うことで無線接続を通じた会話及び作文教育への応用が可能になりつつある。無線 LAN 環境の整備は場所や接続端末の数の制限がないため、様々な遠隔教育に応用した研究が期待されている。

このような IT 通信技術の進歩という背景に基づき、日本語教育分野においてもインターネットを利用した遠隔画像授業の実践的な研究が行われてきている。大塚薫・金才鉉(2008)では、画像通話機能を利用した実践的な授業研究が報告されている。具体的には、日本現地の日本語ネイティブ教師がネットを通じて、韓国の高等学校で行われた20人以上の大人数クラスの初級日本語授業に参加し、韓国人の高校教諭とのチーム・ティーチングによる遠隔

授業が実施された。また、大塚薫・李暲洙(2011)では、日本語母語話者教師による韓国全土にいる学習者を対象とした遠隔小グループ作文授業の実証研究が行われている。この授業では、日本と韓国で2台ずつパソコンを準備し、1台は教師と学習者の姿を映し、1台は電子黒板として利用するという授業の構築が図られている。

このような実践的な遠隔授業を通じて大学で行われている日本語教育への汎用化を図るためには、インターネット環境が整ったパソコンや無線インターネット端末である iPhone や iPad を活用し、遠隔地にいながら即時的なコミュニケーションが取れる環境を整えるとともに、従前のカリキュラムの中にいかに遠隔授業を組み込んでいくかが重要になる。また、教授者がITに関する知識を備え授業へのIT技術の活用を考慮した授業設計を図った上で、授業内容の精選が必要となる。現に、三浦・深川(2009a, 2009b)、深川・三浦(2009)では、日米の学生間で行われたビデオ会議と対面会議を比較分析した結果、ディスカッションのトピックの選択、事前準備としての交流の必要性、ビデオ会議環境の配置の工夫、討論中の *turn-taking* の調整の困難さ、聞き返しの回避、教師の *facilitator* としての役割という点で改善点が述べられている。

そこで、本研究では現在、画像チャットプログラムの一つとして幅広く活用されている Skype を使用し、日本と中国の二国間をつないだ遠隔協働授業を実際に大学で行われているカリキュラム内で構築し、その授業の考察を通して改善点を探り、日本語教育現場での直接的な応用を目指した遠隔協働授業のモデルを提示することを目的とする。

2. 遠隔授業の概要及び実践状況

今回の授業は、日本の大学で行われた留学生対象の上級レベルの日本語作文授業と中国の大学で日本語を専攻している上級学習者を対象に行われた日本映像文化の授業において、両者が共通して学習できる項目を取り上げ、異文化交流の視点を取り入れた授業構成を模索しつつ協働遠隔授業を授業時間内で数回実施した。

2.1 遠隔実践授業概要

今回行われた遠隔授業の概略は表1の通りである。

表1. 遠隔授業の概要

	日本側	中国側
授業期間	2012年10月～2013年2月	2012年9月～12月
授業時間	週2回180分(90分×2コマ)	週1回80分(40分×2コマ)
授業回数	全32回(遠隔授業5回)	全16回(遠隔授業5回)
授業科目名	共通教育日本語Ⅲ(日本語作文授業)	日本映像文化
講義場所	高知大学内講義室(マルチメディア室)	安徽大学内講義室
教授者	高知大学日本語母語話者教師	安徽大学日本語非母語話者教師
学習者	高知大学留学生18名	安徽大学外語学院日語系学生24名
学習者のレベル	日本語能力試験1級程度	日本語能力試験1級程度
対面教育による教授方法	講義室で作文の書き方指導及び学習者同士によるグループ別討論・発表、教授者による学習者の作文のフィードバック	講義室で日本の映画を視聴し、その感想を書いた上でグループ別討論・発表
遠隔教育による教授方法	日本国高知大学と中国安徽大学を	Skype でつないで学習者同士の自己紹介、日本語母語話者教師による発表の留意点の説明、映画視聴後の討論

遠隔授業は、2012年10月から12月にかけて日本側、中国側ともに正規の授業カリキュラム内で大学内の講義室を使用し5回行われた。日本側の授業時間が1限目(8:50～10:20)に、中国側が1・2限目(8:20～9:50)に設定されていたため、授業は時差⁽²⁾を考慮して日本時間の9時30分から10時15分までの45分間とした。

学習者は日本側は高知にある4年制の国立大学の留学生18名であり、上級レベルの学生だが、日本語が専門ではない学生も含まれていた⁽³⁾。また、学習者の出身地は中国が11名、台湾が2名、韓国が4名、セルビアが1名であった。中国側は安徽省にある4年制の国立大学の日本語を専攻している4年生であり、上級レベルの学生である。しかし、日本に留学した経験がある学習者⁽⁴⁾から中国内でのみ学習し会話に慣れていない学習者までおり、コミュニケーション能力に関しては多少幅があった。オリエンテーションを兼ねた最初の講義でパソコン・インターネット使用状況調査、日本語学習歴調査を実施した結果、すべての学習者がある程度のパソコン活用能力を備えており、日本語能力試験1級程度の日本語力を持ち合わせていた。

教授者は、日本側は日本語母語話者教師で、中国側は日本語非母語話者教師であるが、両者ともに日本語教育が専門であり、遠隔授業を行うにあつ

てITリテラシーを備えた授業補助者とともに授業を運営した。また、遠隔授業は日本側と中国側教授者がメールやSkypeを通じて事前に打ち合わせを行い、シラバスを設定し相談しながら実施された。

教授方法は、対面教育においては、日本側は教授者が講義室で作文の書き方指導及び学習者同士によるグループ別討論・発表の指導、学習者の作文のフィードバックを行った。中国側は、講義室で日本の映画を視聴し、その感想を書いた上でグループ別討論及び発表をするという流れで行われた。そこで、両者の共通点である「作文」と「グループ別討論及び発表」に焦点を当て、そこに異文化理解を組み入れ遠隔教育授業を組み立てていった。具体的には、事前準備としての「自己紹介による交流」及び「よりよい発表の仕方についての講義」を行った後、同じ映画を視聴して感想文を書いた上で「遠隔討論」を実施するという構成で遠隔授業が実施された。

2.2 遠隔授業内容

今回実施された日本側の日本語作文授業のカリキュラムは表2の通りである。なお、安徽大学との遠隔接続日は★印で示してある。

表2. 日本側の日本語作文授業カリキュラム

★安徽大学とのSkype接続日

	実施年月日	授 業 内 容		実施年月日	授 業 内 容
1	2012.10.2	・オリエンテーション ・「論理的な文章とは」 ・IT・日本語予備調査	6	2012.10.23	・自己紹介文ピア・ラーニング ・宿題：自己紹介文書き直し
2	2012.10.5	・グループ別自己紹介 ・自己紹介文の準備 ・友達紹介ピア・ラーニング ・宿題：自己紹介文	7	2012.10.26	★自己紹介 ★よりよい自己紹介・発表の仕方
3	2012.10.12	・自己紹介ピア・ラーニング (共通点探し) ★グループ別自己紹介	8	2012.10.30	・よりよいスピーチのまとめ ・自己紹介文3色分け修正 (ピア・ラーニング) ・宿題：自己紹介文修正
4	2012.10.16	・敬語を活用した自己紹介 ・自己紹介文の修正の仕方 ・宿題：自己紹介文の修正	9	2012.11.2	・話し言葉と書き言葉 ・柔らかい書き言葉と硬い書き言葉(文章表現)
5	2012.10.19	・安徽大学の自己紹介文ピア・ラーニング(共通点・質問) ★グループ別自己紹介	10	2012.11.6	・映画鑑賞の観点の説明 ・映画鑑賞「僕の彼女はサイボーグ」

11	2012.11.9	・映画鑑賞「僕の彼女はサイボーグ」 ・宿題：映画鑑賞文	22	2012.12.18	・映画鑑賞文のフィードバック ・定義の仕方
12	2012.11.13	・作文を書く際の留意点の説明 ・映画鑑賞文ピア・ラーニング ・宿題：映画鑑賞文書き直し	23	2012.12.21	・説明文の書き方 ・宿題：自分の国の文化に関する説明文
13	2012.11.16	・グループで論点について討論 「恋愛と結婚」、「同棲」等 ★グループごとに遠隔討論	24	2012.12.26	・比較・対照の仕方
14	2012.11.20	・映画鑑賞文のフィードバック ・文末表現の違い ・自動詞文・受身文 ・助詞の「は」と「が」	25	2013.1.8	・段落の要約の仕方 ・レポート「簡用語」の説明
15	2012.11.22	・語や文の名詞化 ・首尾一貫した文	26	2013.1.11	・説明文ピア・ラーニング ・宿題：説明文書き直し
16	2012.11.27	・句読点の打ち方 ・各種記号の使い方	27	2013.1.15	・レポート「簡用語」に関する新聞記事の要約、感想文、意見文の説明
17	2012.11.30	・引用の仕方 ・原稿用紙の書き方	28	2013.1.22	・文章の要約の仕方 ・説明文3色分け修正(ピア・ラーニング) ・宿題：説明文修正
18	2012.12.4	・段落の構成の仕方 ・映画鑑賞の観点の説明 ・映画鑑賞「大奥」	29	2013.1.25	・説明文「自分の国の文化」の発表①
19	2012.12.7	・映画鑑賞「大奥」 ・宿題：映画鑑賞文	30	2013.1.29	・説明文「自分の国の文化」の発表②
20	2012.12.11	・段落相互の関係 ・文章全体の構成 ・映画鑑賞文ピア・ラーニング ・宿題：映画鑑賞文書き直し	31	2013.2.1	・説明文「自分の国の文化」の発表③
21	2012.12.14	・グループで論点について討論 「女性の役割・社会進出」 ★グループごとに遠隔討論 ・事後アンケート調査	32	2013.2.5	・レポート「簡用語」提出

今回実施された中国側の日本映像文化の授業カリキュラムは表3の通りである。なお、高知大学との遠隔接続日は★印で示してある。

表3. 中国側の「日本映像文化」授業カリキュラム

★高知大学との Skype 接続日

	実施年月日	授 業 内 容		実施年月日	授 業 内 容
1	2012.9.7	・オリエンテーション ・映画鑑賞「おくりびと」 ・日本と中国の葬式の説明 ・IT・日本語予備調査	9	2012.11.9	・映画鑑賞「僕の彼女はサイボーグ」 ・映画鑑賞文作成
2	2012.9.14	・映画鑑賞「おくりびと」 ・映画鑑賞文作成 ・グループ討論	10	2012.11.16	★グループごとに遠隔討論 ・映画「僕の彼女はサイボーグ」グループ討論
3	2012.9.21	・映画「おくりびと」鑑賞文発表	11	2012.11.23	・映画「僕の彼女はサイボーグ」鑑賞文発表
4	2012.9.28	・映画「おくりびと」フィードバック ・映画鑑賞「告白」	12	2012.11.29	・映画「僕の彼女はサイボーグ」フィードバック ・映画鑑賞「大奥」
5	2012.10.12	★グループ別自己紹介 ・映画鑑賞「告白」 ・映画鑑賞の論点「命」	13	2012.12.7	・映画「大奥」鑑賞文作成 ・グループごとの討論
6	2012.10.19	★グループ別自己紹介 ・映画鑑賞「告白」 ・映画鑑賞文作成 ・グループ討論	14	2012.12.14	★グループごとに遠隔討論 ・映画「大奥」鑑賞文発表
7	2012.10.26	★自己紹介 ★よりよい自己紹介・発表の仕方 ・映画「告白」鑑賞文発表	15	2012.12.21	・映画「大奥」フィードバック ・事後アンケート調査
8	2012.11.2	・映画「告白」フィードバック ・映画鑑賞「僕の彼女はサイボーグ」	16	2012.12.28	・期末試験

今回の遠隔授業は、日本と中国の大学における正規の授業内に両者の交流を行うという観点から遠隔接続のテストも兼ねた「自己紹介」、遠隔討論を実施するに当たって留意事項を説明した「よりよい発表の仕方」の講義、そして「遠隔討論」という構成で行われた。日中双方ともに2台のパソコンが準備され、1台は教室に設置されているプロジェクターのスクリーンに発表者を映し出すよう設定され、もう1台は他の学習者の様子や遠隔授業のファシリテーターをしている教員のやりとりを映し出すという配置で設定した。なお、日本側はサブのパソコンの代替として無線LAN環境でiPadを使用し、発表者が移動せずに自己紹介や討論が進行できるよう授業を設計した。

「遠隔自己紹介」の事前準備としては、自分を表すキーワードを考えさせた上で、「自分の長所と短所」、「大学生活で頑張っていること」、「最近のマイブーム」のいずれかからテーマを選び自己紹介文を書かせた後、学習者間

でピア・ラーニング⁽⁵⁾を行い再度作文を書き直させた。その後、写真付きで日中双方の自己紹介の作文を交換し合い、「遠隔自己紹介」を行う前に、グループに分かれて送られてきた自己紹介文を読み、それぞれの作文に対する質問事項を考えさせた。「自己紹介」の遠隔授業時には、事前に分けられたグループでお互いに自己紹介の作文を読み合った後、グループのメンバーの共通点を探させ、グループごとに共通点を発表させた後に、各自が一言ずつ自己紹介をしていった。そして、自己紹介終了後、授業担当教員が各自の自己紹介文の文法の間違え、日本語らしくない表現、表記上の留意事項にするしをつけ、学生各自に再修正させた後、添削して返却した。

また、「遠隔討論」を行うに当たっても、映画を視聴した後、その鑑賞文を書かせ、学習者間でピア・レスポンス活動を行い、自分の作文を修正させた。その後、日中双方の鑑賞文を読み合い、「遠隔討論」を実施する前に、それぞれのグループに分かれて「遠隔討論」で話し合うテーマの論点に対して、双方の鑑賞文を踏まえて意見を話し合っまとめさせた。「遠隔討論」授業時には、グループごとに互いの意見を述べ合った後、それぞれの意見に対して質問をし合い、それに対して回答するという形式で遠隔グループ討論を行った。そして、「遠隔討論」が終了した後に、授業担当教員が各自の鑑賞文を添削して返却するという形で授業が実施された。

遠隔授業後には、学生が自分自身でその日の授業を振り返る「内省シート」を記入し提出することにした。この「内省シート」の質問項目としては、「今日、あなたは一生懸命、授業に参加しましたか（1～5の五段階評価）」、「今日の授業であなたは何を学びましたか」、「今日の授業の問題点は何ですか」のような質問項目を設け、学習者自身の内省を促すようにした。また、教員側はこのシートに書かれた内容から、学習者一人ひとりが抱えている問題点や課題、要望等を知り、次回の授業内容へ反映させるようにした。



日本側の授業風景



中国側の授業風景

3. 授業評価及び分析

今回の授業では、オリエンテーション時に行ったパソコン・インターネット使用状況調査、日本語学習歴調査に加え、遠隔授業を実施する前に事前アンケートを、遠隔授業終了時に事後アンケートを五段階評価で実施した。また、各遠隔授業終了時に内省シートを書いてもらうとともに、授業終了時に授業評価アンケート調査としてそれぞれの学習者に感想を書いてもらった。アンケートの集計は、学習者が選んだ五段階に分けられた番号中、最高が5、最低が1として点数化し、平均値を算出した⁽⁶⁾。また、日中双方の教授者の授業全般に関する議論も評価の対象とした。

3.1 遠隔授業方式に関する評価

今回の遠隔授業は、双方の授業時間中に合計5回の接続が行われたが、1回の平均的な接続時間は45分程度であった。日中双方が希望する遠隔授業回数については、日本側が4.3回、中国側が6.5回、1回の授業時間に関しては日本側が53.1分、中国側が57.2分が適当だと回答していた。また、遠隔授業の満足度は五段階評価で日本側が2.8、中国側が3.7であった。日本側、中国側双方ともに授業全体の満足度が4.6であったので、対面授業と比較して遠隔授業の満足度は相対的に低いと言える。

遠隔授業の方式に関して、今後どのような形式で授業を行えばよいかを質問したところ、日本側は68.8%が、中国側は79.2%が「現在のままの形式でよい」、「授業形式が面白い」と回答していた。それに加えて「両方の学生がそれぞれ1台ずつパソコンを利用して交流した方がよい」、「日本側と中国側のそれぞれがグループに分かれるだけでなく、両者の学生を混ぜたグループを作った方がよい」との意見があった。

3.2 授業内容に関する評価

今回の遠隔授業は「自己紹介」、「よりよい発表の仕方の講義」、「映画鑑賞後の遠隔討論」の構成で進められたが、日本側の学習者の授業への参加度はそれぞれ3.6、4.1、4.2であり、中国側の参加度は3.7、4.0、4.0であった。

「自己紹介」の感想としては、「新しい自己紹介の形式で面白い」、「各国の学生の趣味や経験などを理解することを楽しんだ」、「親しい雰囲気と交流できる」、「口語の上達に役に立つ」、「自分が積極的に参加できる」という肯定的な意見がある一方、「時間が少なく向こうの学生との交流があまりなかつ

た」、「音質が良くなく自己紹介の内容があまり聞こえなかった」という改善点が挙げられた。

「よりよい発表の仕方」に関しては、「中国でも日本人の先生の授業を受けられて聴解の勉強になり面白かった」、「新しい形式で学習の効果が高く、皆喜んでいる」、「次の討論の前に、発表の仕方を習うことは必要だ」という肯定的な意見が中国側では大部分を占めた。

「遠隔討論」では、「他の国の学生たちのさまざまな意見や感想を聞いて見聞が深められる」、「予めお互いの作文を読んでいたの、授業のときは熱い討論ができた」、「皆積極的に参加し活発で雰囲気がとても良い」という肯定的な意見がほとんどであった反面、「討論が深いところまで行かなかった」、「ネットの環境が悪く、討論の声がはっきり聞こえなかった」、「時間が少し足りない」という問題点が挙げられた。

3.3 Skype の運用に関する評価

大塚 (2008) で指摘されているように、インターネットを利用した画像通話の最大の問題点は、回線の不安定性である。今回の遠隔授業も、インターネット回線の速度の低下及び回線が不安定な場合に、画像、あるいは音声のいずれか、または両方の接続が切断されるという事態が生じた。日本側は2台のパソコンを準備したが、1台は有線 LAN を使用してメインのパソコンを運用し、もう1台は無線 LAN (WiMAX) を使用し、学生が発表する際には移動せずに iPad を回しながら各自が自己紹介や意見が述べられるように設定した。同様に、中国側も2台のパソコンを準備したが、5回の接続中、2台のパソコンが起動できたのが3回であり、他の2回は1台のパソコンのみの接続で授業を進めざるを得なかった。また、接続ができて回線が不安定であり、常に音声にノイズが入る状況であったり画像・音声ともに乱れたりしたため、1度は画像を消して音声のみで遠隔授業を進行させた。

学習者の感想でも日中双方ともに「設備・通信環境の改善が必要」、「画像や音声聞こえづらいというネットの回線の問題で、話がうまくできなかったのが残念」、「接続に時間がかかる」等の問題点が挙がっていた。

3.4 遠隔授業の改善点

授業を受講する前の中国人学習者への調査では、日本人と日本語で会話したことがある学生が24名中22名で、日本人以外の外国人と日本語で会話した

ことがある学生が24名中16名であった。遠隔授業終了時のアンケート調査によると、今回の遠隔授業で役に立った点としては、主に以下の5点が挙げられていた。1つ目に、「日本の生活について分からなかったところが分かるようになったこと」、「日本以外の他国の文化を知ったこと」という異文化理解の側面、2つ目に、「外国人留学生と友達になれて、一緒に良い学習環境が作れた点」、「世界中の国々の人とコミュニケーションができる点」という異文化交流面、3つ目に「直接会うのは不便なので遠隔方式を使って交流できること」、「直接的な交流ができ、授業の形式が興味深い点」という遠隔授業の形式的な側面、4つ目に「日本人の先生の講義のヒヤリング」、「日本語の会話練習や作文、自分の意見の発表の仕方を学ぶことができること」という日本語学習面、5つ目に、「外国人留学生の日本語の発音や使い方から、自分の長所と短所に気づいた点」、「外国人と日本語で話すときに話すスピードに注意しなければならない点」という自身の日本語に関する内省面である。

一方、今回の遠隔授業での改善点としては、主に以下の3点が挙げられていた。1つ目に、「ネットのスピードが遅く、画面や音声のはっきりしない点」、「教室の設備の改善」というネットの回線や教室の設備の不具合の問題、「Skypeをつなぐとき、時間がかかること」、「学生が事前に発表の順番など準備をして接続時間を大切にされた方がよい点」、「人数が多かったので発表の時間が足りなかった点」という接続時間の長さの問題、「発表が簡潔すぎて、よく自分の考えが表せないこと」、「授業の内容はもっと豊かになった方がよい点」という授業内容の問題が挙げられる。また、「皆の前で日本語を話すのが恥ずかしい」、「Skypeを通じて話す際、周りの人の声が気になって大変緊張した」、「発表するとき緊張しすぎて、このような発表の形式も初めてなのでよくできなかった」というSkypeを通した遠隔発表形式に対する不慣れを指摘する意見も見られた。その他、日本側では「中国の大学だけではなく、ほかの国の大学と一緒に遠隔授業をしたい」という要望もあった。

また、今後の遠隔授業の内容はどのようなものが適当かを質問したところ、今回の遠隔授業で行ったような討論形式をより内容を深めて行いたいという意見が大部分を占めた。テーマに関しては「日本の留学生活について」、「日本の実生活(生活習慣、教育、建築、衣食住等)」、「大学生活と就職活動」、「時事問題や現在流行しているものについて」、「各国の風習や飲食文化」、「学生が自分で討論したいテーマ」等身近な内容が挙がっていた。

4. 遠隔授業の考察

遠隔授業の希望接続時間や希望回数、遠隔授業方式に対する満足度に関しては、相対的に日本側の学習者より中国側の学習者の方が高い数値で回答している。これは、日本に留学している学習者にとっては、他国の留学生と常に交流している状況であり、ネットの回線が不安定な中国との遠隔授業にあまり利点が感じられないこと、中国側の学習者にとっては、ネットの回線が不安定であっても日本にいる他国の留学生と接する機会は貴重であり、日本の授業方式に関しても興味が先行する点が数値として表れていると考えられる。日本側の学習者が対面教育と比較して遠隔教育の満足度が相対的に低い数値を示しているのも同様の要因だと見られる。また、授業内容に関する評価については、両国とも数値に有意差がみられず、比較的高い参加率を示していることから、遠隔討論の有効性が裏付けられた。

さらに、Skypeの運用に関しては、インターネット回線の速度の低下による問題点が挙げられたが、大塚・若月(2012)において、2011年度に日本と韓国の大学でSkypeを介して実施された協働授業内では画像通話に問題が生じなかった点から、中国側のインターネット回線の整備が課題になると考えられる。世界最大のCDN (Contents delivery Network) 企業であるAkamaiが2010年末に発表した「世界におけるインターネット速度の順位」⁽⁷⁾によると、韓国が世界第1位で16.63 Mbit/s、日本が第3位で8.03 Mbit/s に対して、中国は第42位で0.86 Mbit/sであった。今後、中国のインターネット回線状況が改善されていくのに伴い、安定した環境での遠隔授業が実施されることが期待される。

今回の遠隔授業は、日中双方ともに正規のカリキュラムの授業時間内で行われる日本語作文授業と日本映像文化の授業との共通項を取り上げ、双方の学生が交流を深めつつ日本語の学習ができる遠隔討論を中心に授業のシラバスを組み立てて実施された。このような授業を実施した結果、対面授業とは異なり授業を円滑に進めるために予めネットワーク環境を確認した上で、事前の準備として両国の学生の交流や作文内容の交換、双方において討論の論点に関するグループごとの話し合い、発表内容の準備等が必要になることが分かった。そのような準備を整えて遠隔授業に臨めば、交流時間を最大限に活用し、互いに自分の意見を建設的に述べ合ったり、積極的に質問をし合ったりする良い機会となると考えられる。また、日本側の留学生は中国の他、台湾、韓国、セルビアの学生がいたため、各国の討論の論点に関する意見も

交換することができ、異文化に関する見聞を深めることにもつながった。さらに、Skypeを通して意見を述べるという経験を通して、相手に伝わる日本語で大きい声で明確にゆっくりと話す技術の習得や言葉遣いや表情、ジェスチャーによる自分の気持ちの表現の仕方に関しても内省を促し、それらのスキルを学ぶ機会となった。その上、中国の学習者にとっては、日本における授業方式や日本語母語話者教授者による講義に触れることにより、学習者の日本に対する興味や関心の喚起にも一役買うことができた。

一方、改善点としては、教室の設備を含めインターネットの回線を安定的に運用できるようにし、Skypeの画像や音声が届かないよう授業が支障なく進行する環境を整えることである。「1. 研究の背景と目的」で述べたように、衛星会議システムを使用する場合、回線は安定的になるがコストも嵩み、ネット環境の整ったパソコンを教室内に持ち込めば誰でも日本語教育授業へ応用できるという汎用化の面で問題となる。今後、両国においてさらなるIT通信技術の進歩及び社会インフラの整備が進行すると考えられるので、遠隔授業を行うに当たり事前のテストを重ね授業の環境を整えていく。また、ネット環境の整備に伴い、接続時間に関しても画像通話システムがスムーズに運用できることにより改善されることが期待される。

また、遠隔授業方式に関しては現状のままの形式に対して満足度が高かったが、授業内容をより深め、多くの学習者の積極的な参加を促すためにも討論のテーマの選定及び討論の仕方が重要になる。今回の討論のテーマは、映画鑑賞をした後に映画に表れた日本社会の文化現象(言語、行為、考え方等)の中で興味深いものを取り上げ、その理由を考えさせ鑑賞文を書かせた上で、学習者の作文中に出てきた論点を抽出し選んだものである。「僕の彼女はサイボーグ」の場合、「誕生日プレゼントを自分自身に贈るか」、「学生時代の恋愛と結婚は別か」、「結婚する前に同棲するべきか」、「守られる男性と守る女性のカップルについてどう思うか」が論点となった。また、「大奥」では、「女性の地位の向上による社会体制の変化」、「女性の強さとは何か」、「女性の幸せとは何か」、「女性の社会進出による社会や家族のあり方」、「女性の優しさとは何か」について各グループで意見を交換し合った。いずれも現代の日本社会と自国の文化を比較した上で論じるもので、両国の学習者ともに同じテーマを教室内で論じた後での意見の発表と質問という形式であった。そのため、遠隔討論前の教室でのグループに分かれた学習者同士の議論は白熱し積極的な参加が見られたが、日本と中国間の遠隔討論においては、討論と

いうより意見の交換と質疑応答という形式になった。これは、ネット上で画像による学習者間の直接的でインタラクティブな交流が図られてはいたが、遠隔での接続であり多少なりともタイムラグが生じる点、グループの代表者が皆の前でグループごとの意見を述べた上での討論となったので、他の学習者は聞いているだけになったという点、グループを入れ替える移動の時間が必要であり討論がテンポよく進行しなかった点が原因だと思われる。この点に関しては、ネット回線が安定的に運用できれば教室内に5、6台パソコンを持ち込み、両国の各グループに1台ずつパソコンを配置し、グループごとに遠隔討論を行い交流を深めるという形式で授業を構成することにより解決すると考えられる。また、今回の遠隔授業では、2台のパソコンを準備し日本と中国を Skype でつなぐという方式で授業を実施したため、発表者は皆の前で発表をすることになり緊張を強いられる場合もあったが、その問題も解決され授業の活性化につながるであろう。

5. 今後の課題

以上のように、遠隔討論を中心とした遠隔日本語授業を日中の二大学間で構築し実践したが、学習者は遠隔授業方式に関しては概ね高い評価であり、授業内容に関しても事前準備を整えて臨む遠隔討論形式の有用性が実証された。この形式の授業は、異文化理解、異文化交流、遠隔による授業方式、日本語学習、日本語技能における内省の面で効果を有する反面、ネットの回線及び教室の設備の不具合や接続時間の長さ、授業内容面、特に遠隔討論方法において改善点が挙げられた。

今回の遠隔授業は日本の高知大学と中国の安徽大学という協定校間で実施されたが、日本にいる日本語母語話者教授者と中国にいる日本語非母語話者教授者のティーム・ティーチング方式による遠隔授業の一つのモデルとして汎用的に運用することが可能だと思われる。また、協定校間でこの遠隔授業システムを構築することで、両国の学生の異文化理解並びに日本語コミュニケーション力の向上に寄与するとともに、協定校間の大学間交流を推進し連携を強めることに繋がる。さらに、両者ともに現地にいながらにして国際交流が行えることにより、学生の国際感覚の育成の推進に貢献することができる。その上、中国から本学に交換留学をする予定の学生が現地にいながらにして留学前に日本側の授業を受講することが可能になるため、留学の心構えが整えられ、日本に留学してからの生活にスムーズに適応し、勉学・研究活

動への移行が円滑に行われることになる。

このように、今後も日本語教育により積極的に応用できるよう二国間のみならず多国間での協働授業や学内のリソースを活用したオムニバス形式での授業方式の樹立を視野に入れ、遠隔教育の利点を生かした協働授業の構築を推進していきたい。

附記

本研究は、平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号23520634「遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究」(研究代表者：大塚薫)の助成を受けて実施された研究である。

注

- (1) 今回の遠隔授業で使用した Skype は画像通話システムとして世界中で無料で使用されているプログラムで、Web カメラとマイクがあればビデオ通話が可能である。他にもインスタントメッセージ(IM)や音声通話、有料のグループビデオ通話等の機能もあるが、今回は遠隔授業での活用を目的に画像通話機能を利用した。
- (2) 中国と日本は1時間の時差があり日本が中国より早いため、両者の授業時間が重なる時間帯に遠隔授業を設定した。
- (3) 高知大学の受講生の内訳は正規生3名、特別聴講学生(交換留学生)が15名であり、後者は日本語を専攻している学生であるが、前者は人文学部社会経済学科1名、教育学部2名である。
- (4) 安徽大学の受講生の中には、高知大学に短期交換留学をした学生も6名含まれていた。
- (5) 「ピア・ラーニング」とは、Peer (仲間)と協力して学ぶ(learn)学習方法のことである。仲間とともに課題に取り組み、その過程を共有することで、リソース(resource)が増えることにつながる。お互いに話し合うことにより理解が深まり、自分を客観的に眺めることができ、新しい発見ができるという学習方法である。実際の授業では、学生が3～4名のグループになって互いの作文を読み合い、良い点や不明確な点、訂正すべき点を指摘し合った。
- (6) アンケート調査の項目中には無回答の者もあり、平均値を算出する際、必ずしも分母が統一されているわけではない。
- (7) Akamai 「世界におけるインターネット速度の順位」

<http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=acro102&logNo=40149014244> (2013.02.20閲覧)

参考文献

- 大塚薫(2005)「インターネットコミュニティを利用した日本語学習者参加型授業の試みー発表のスキル向上を目的とした授業の構築ー」、『高知大学留学生センター紀要』創刊号、高知大学留学生センター、pp.47-63
- 大塚薫・李暲洙・金才鉉(2006)「日本語遠隔教育におけるインターネット画像授業の実証研究ー多重画像音声チャット機能を利用した e-learning 授業の構築ー」、『日本語学研究』第16輯、韓国日本語学会、pp.69-88
- 大塚薫・李暲洙・金才鉉(2008)「遠隔チーム・ティーチング授業実践ー高等教育における日本語母語話者教授者参加型画像授業ー」、『日語教育』第45輯、韓国日本語教育学会、pp.83-97
- 大塚薫・金才鉉(2008)「日本語母語話者教授者参加型遠隔チーム・ティーチング授業の試み」、『メディア教育研究』第5巻第1号、独立行政法人メディア教育開発センター、pp.115-121
- 大塚薫・李暲洙・金才鉉(2008)「インターネットコミュニティを利用した遠隔作文授業モデルー反復作文学習方式による授業の構築ー」、『日本文化研究』第28輯、東アジア日本学会、pp.179-197
- 大塚薫(2008)「SNSを利用した日本語作文授業の試みー対面教育及び遠隔教育を統合した授業ー」、『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第2号、高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門、pp.58-72
- 大塚薫・李暲洙・金才鉉(2010)「高等教育における遠隔チーム・ティーチング授業実践研究ーインターネット画像通話プログラムを利用した日本語母語話者教授者参加型授業ー」、『日語教育』第53輯、韓国日本語教育学会、pp.93-103
- 大塚薫・朴敏瑛・李暲洙(2011)「画像参加型日本語講読チーム・ティーチング授業における日本語母語話者教授者の役割」、『日本学報』第86輯、韓国日本学会、pp.99-107
- 大塚薫・李暲洙(2011)「インターネット画像通話プログラムを利用した遠隔日本語作文授業方法の構築」、『異文化コミュニケーションのための日本語教育』、高等教育出版社、pp.524-525
- 大塚薫・李暲洙(2012)「원격일본어교육연구(遠隔日本語教育研究)」、『日本語学研究の最前線2012』、韓国日本語学会編、pp.447-463
- 大塚薫・若月祥子(2012)「遠隔チューター参加による少人数グループ化作文授業の実証研究」、『2012年日本語教育国際研究大会予稿集』第2分冊-2、日本語教育学会、p.317

- 深川美帆・三浦香苗(2009)「ビデオ会議システムを使用した異文化ディスカッションにおける turn-taking の諸相—直接型対面会議との比較を通して—」、『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』、平成19-20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究課題番号19520450)研究成果報告書、pp.46-66
- 三浦香苗・深川美帆(2009a)「ビデオ会議及び対面会議の実践報告—平成20(2008)年—」、『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』、平成19-20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究課題番号19520450)研究成果報告書、pp.31-45
- 三浦香苗・深川美帆(2009b)「ビデオ会議の問題点とその改善点—改善版ビデオ会議に向けて—」、『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』、平成19-20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究課題番号19520450)研究成果報告書、pp.67-77
- 宮崎里司(2002)「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム」、『講座日本語教育』第38号、早稲田大学日本語研究教育センター、pp.16-27
- 宮崎里司(2004)「接触場面の多様化とマルチメディア日本語教育：海外と遠隔インターアクションの試み」、『2004年日本語教育国際研究大会予稿集』発表1 2004年日本語教育国際研究大会実行委員会編、pp.54-59
- 李暲洙・大塚薫(2003)「韓国における遠隔教育の現状と課題—韓国放送通信大学日本学科の事例を中心に—」、『東アジア日本語教育・日本文化研究』第6輯、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、pp.267-287
- 若月祥子・大塚薫(2012)「読み手を意識した作文授業の試み—日本人学生を遠隔チューターとして—」、『日本学報』第93輯、韓国日本学会、pp.43-52

おおつか かおる (高知大学国際・地域連携センター国際連携部門准教授)
WANG Yong Ping (安徽大学外語学院日本語系講師)

